京都府立大学学術報告（理学・生活科学）第31号　B系列 p. 23〜28（1980年11月）

バスケット・ボールの指導に関する研究（2）

——国際試合の部——

小　森　正　巳

Studies on Basket Ball Coaching (2)

——International Games——

MASAMI KOMORI

台湾の国内的に通用したバスケット・ボールの試合の内容が，果して国際的な試合にどのように通用したかを前回報告した国内試合での内容と比較し，検討した．
国内試合においては，相互のスカウティングが行われ研究して対戦が可能である．
国際試合の場合は対戦相手のチーム内容が充分に把握されないまま対戦することが多い．
したがって，訓練された内容がどの程度，自分のチームのペースで対戦できるかが，重要なポイントになる．
今回の国際試合の内容では，可成り良い成果が得られ，着実に進歩していると判断される．

緒　　言

中華民国（台湾）は，私が相談を受けてチーム強化に協力をはじめて，間もなく中華人民共和国の国連加盟とともに，国際社会から排除されるという現象がおきた．したがって，私との協力関係も中断せざるを得ないと判断したがスポーツ・文化の交流の道は開かれていた．対日断交のあとも両者の民間の交流は積極的に行われた．台湾においては，国連常任理事国であった分担金の支払いが不要となった資金を共産圏を除く自由世界との民間交流の資金として活用する政策がとられた．すなわち民間外交である．青少年の文化・スポーツ活動のため，海外遠征を含む諸活動への補助金が交付されるようになった．

台湾国内で良い成績をあげれば，政府よりの交付金で海外遠征が許可され，又国交の残された国より青少年活動に役立つ団体を台湾に招待することが，以前にまして多くなった．この点では，日本の青少年よりは海外への視野は，開けていた．

特に，アメリカ，中南米，オーストラリヤとの交流は多かった．アジア地区では，韓国が中心であったが，日本への非公式招待も可成りあった．

バスケット・ボール・チームも本場アメリカとの交流が多く，またアメリカは自由主義国家の大国として台湾に対する協力を惜しまなかった．

したがって，バスケットの世界では，孤児的な扱いはなかった．

1973年から1976年にかけて，世界の女子バスケットのランキングは，ソ連は超Aクラスであった．

それに続く，Aクラスの国家は，アメリカ，日本，韓国，東欧圏のチェコスロバキヤ，南米のブラジル，オーストラリヤなどが挙げられていた．

台湾のチームも，アジア地区では，日本，韓国につぐ力を有していたが，世界選手権の出場資格は，日本，韓国のためにとれない状態であった．その上，中華人民共和国の世界バスケット連盟加入が認められた時点で，除名されて，選手権大会への出場は不可能になった．したがって，海外遠征で受け入れ国との国際試合を毎年実施することになった．

今回の試合内容も多くの国際試合の中から，主としてAクラスグループの国々との試合を抽出して検討したものである．

京都府立大学生活科学部保健体育学研究室
Department of Health and Physical Education, Faculty of Living Science, Kyoto Prefectural University

海外遠征では，時差，食事，気候，さらに移動による疲労など，環境の変化を克服しつつ，対戦するので国内試合よりは負担も多いこともあった．

チームが目覚すバスケットが，世界に通用するために選択した〝パワーとスピード〟のあるバスケットであるので，一段とコンディションづくりに神経をつかって努力しなければならなかったはずである．

少くとも，チームは国家意識をはっきりと自覚し精神面での凝集度は高かったといえる．

このような歴史的，社会的背景の中でバスケットのチームとしての技術的な訓練の成果を客観的な資料として把握し得るには，より詳細な技術や試合内容の分析が必要となるが，前回指摘したように，言語上の制約によって，大づかみな分析項目になっている．

しかし，チームが目ざした方向性が推進されているかどうかを看取できれば，指導計画の良否を評価することが可能である．

研究方法

京都府立大学学術報告　第30号 (p. 56) 2.　公式試合の項目別データを整理して，第4表，第5表の国際試合の内容を得た．

前回の第1表，第3表の試合内容と第4表，第5表の内容を比較するために，第1図より第6図を作成し比較検討した．

第4表　1972日本遠征試合

（3勝5敗）

項　目	味方チーム	相手チーム
試攻数	599 (74.9)	622 (77.8)
F. G. 数 / 試 F. S. 数	195 (24.4) / 485 (60.5)	201 (25.1) / 518 (64.8)
F. S. 成功率 (%)	40.2	38.8
F. T. 成功数 / 試 F. T. 数	60 (7.5) / 107 (13.4)	112 (14) / 156 (19.5)
F. T. 成功率 (%)	56.1	71.8
M. P. 回数	114 (14.3)	104 (13.0)
M. P. 回数 / 試攻数	114 / 599	104 / 622
M. P. 率 (%)	19.03	16.7
対戦チーム名	三井生命，ユニチカ宇治，日立戸塚，三菱電機，日立甲府，市邨短大，シャンソン化粧品，大阪体育大学	

F. G.: Fieldgoal　F. S.: Fieldshoot
F. T.: Free throw　M. P.: Miss play
（ ）内　1試合平均回数

結果と考察

1. 1972年，私のもとに赴日訓練に参加したときに，日本リーグに所属する日本のAクラスチームとの対戦（8試合）を行った結果は，野投の成功率をのぞく，各部面で日本チームに劣っている．（第4表参照）

   5年間の訓練の結果は，1976年に滞日中に実施した日本リーグ級のチームに5勝1敗と，各部面で，日本チームを凌駕するか，同等のチーム力を発揮して，訓練の成果を見ることができる．（第5表参照）

   とくに，試攻数において，日本チームに対して攻められなかったものが，日本チームを上まわる攻撃回数を身につけたことに成功したことは，チームの積極性が結実していることを示している．（第4表，第5表参照）

2. 攻撃的なバスケットをするためには，試攻数の増加が必要である．これはスピーディなボール運び（パス・プレーを中心とした）によるゲーム展開が必要である．1972年以降，試攻数の増加が見られるが，1974年に台北における韓国チームとの対戦において，巧みな韓国の試合運びに，自己のチームのペースで，対戦できないまま敗れている．国内試合では着実に攻撃回数が増加しているのに，巧みな韓国のペースで自滅している点，まだ対戦相手によっては技術的に通用しないことを証明している．（第5表参照）

3. 1973年のオーストラリヤ圏への遠征，1975年のアメリカ，中米，南米遠征には，可成りの連戦と移動が選手の疲労を増大させたにもかかわらず，体力的に可成りの持久性を有するチームに育っている．

   特に1975年のアメリカ・中米・南米への遠征は，全勝している．この年に世界選手権がコロンビヤで行われたのであるが，コロンビヤ国家チーム（世界選手権大会で7位となった）に3連勝し，オマハで行われた，カナダ，メキシコ，アメリカ，中華民国の四強大会で全勝している．

   チーム力が安定し，訓練の成果が看取できる．（第5表参照）

4. 第1図(a)第4図に示されるように'72年をのぞいて，試攻数が相手チームを上回って積極性のあるバスケットを展開できるようになった．

   さらに第3図(a)に示されるように野投の成功率が，43%を超えて得点力の増大に結びついている．

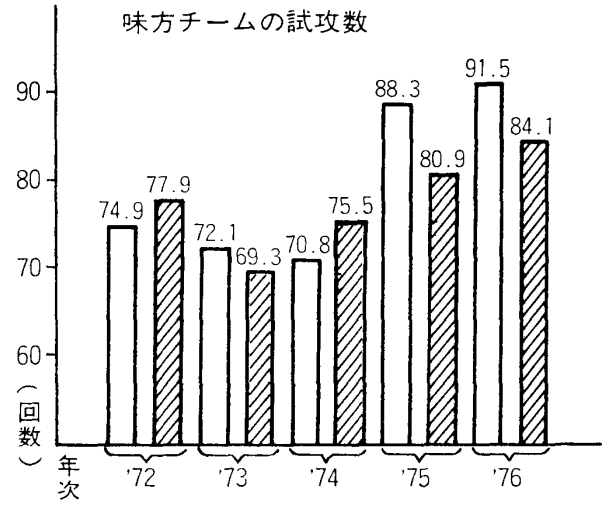
第5表

年次・勝敗	1973 （7勝3敗）		1974 （3勝2敗）		1975 （10勝0敗）		1976 （5勝1敗）	
遠征先	オーストラリヤ・ニュージーランド		台北での国際試合		アメリカ・メキシコ・コロンビヤ		日本	
項目	味方チーム	相手チーム	味方チーム	相手チーム	味方チーム	相手チーム	味方チーム	相手チーム
試攻数	721 (72.1)	714 (71.4)	354 (70.8)	348 (69.6)	883 (88.3)	772 (77.2)	549 (91.5)	462 (77.0)
F. G. 数 / 試 F. S. 数	265 (26.5) / 613 (61.3)	222 (22.2) / 586 (58.6)	140 (28) / 294 (58.8)	113 (22.6) / 302 (60.4)	345 (34.5) / 752 (75.2)	246 (24.6) / 627 (62.7)	203 (33.8) / 462 (77.0)	161 (26.8) / 376 (62.6)
F.S.成功率 (%)	43.2	37.9	47.6	37.4	45.9	39.2	43.9	42.8
F.T.成功数 / 試 F. T. 数	90 (9) / 152 (15.2)	107 (10.7) / 172 (17.2)	23 (4.6) / 38 (7.6)	49 (9.8) / 70 (14.0)	93 (9.3) / 145 (14.5)	118 (11.8) / 225 (22.5)	48 (8) / 77 (14.5)	41 (6.8) / 73 (12.2)
F.T.成功率 (%)	59.2	62.2	60.5	70.0	64.1	52.4	62.8	56.2
M. P. 回数	108 (10.8)	124 (12.4)	60 (12)	46 (9.2)	131 (13.1)	145 (14.5)	87 (14.5)	86 (14.3)
M. P. 回数 / 試攻数	108 / 721	128 / 714	60 / 354	46 / 348	131 / 883	145 / 772	87 / 549	86 / 462
M. P. 率 (%)	14.97	17.92	16.94	13.21	14.83	18.87	15.84	18.61
対戦チーム名	南オーストラリヤ選抜，西オーストラリヤ選抜，カンタベリ代表，ブリスベン代表，ニュージランドナショナルチーム，オールシドニー，ラウストン代表，オークランド選抜，西サバーブ代表		アメリカケネディ大学，韓国朝興銀行，韓国国民銀行，韓国第一銀行，アメリカベンチャー・フォア・ビクトリー(キリスト教女子選抜)		汎アメリカクラブ選手権へ招待（於オマハ） アメリカ代表，メキシコ代表，カナダ代表 ・プリンセス大学 ・コロンビヤナショナルチーム（3戦3勝） ・ロスアンゼルス・オールスター ・ドミニカ代表（2戦2勝）		ユニチカ宇治，日立甲府，シャンソン化粧品（2試合），大阪体育大学，関西学生オールスターズ	

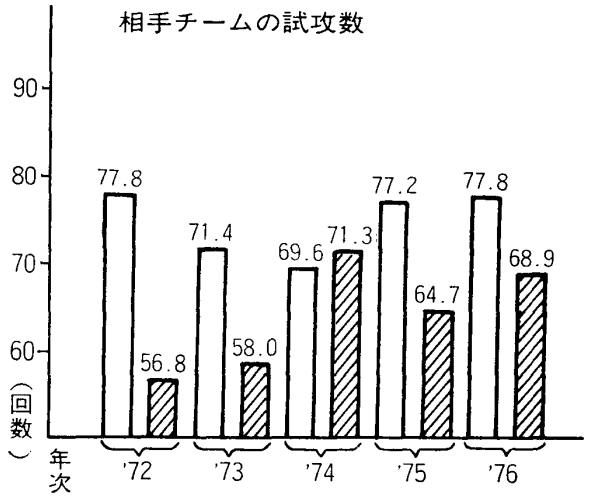
F. G.: Field goal　F. S.: Field shoot　F. T.: Free throw　M. P.: Missplay
（ ）内　1試合平均回数

国際試合と国内試合の項目別比較　（1試合平均）

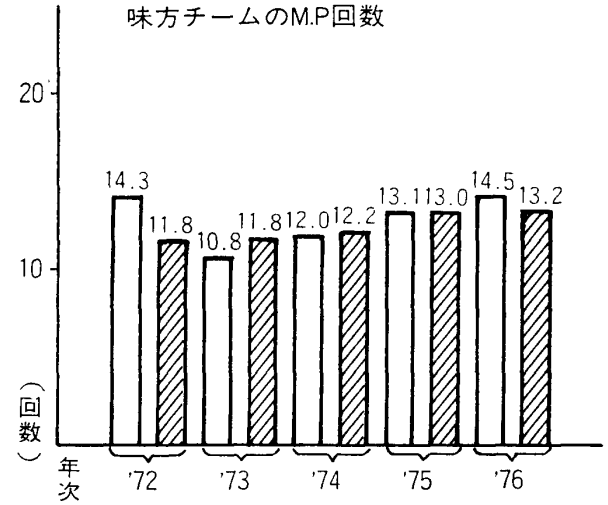
（第1図a）



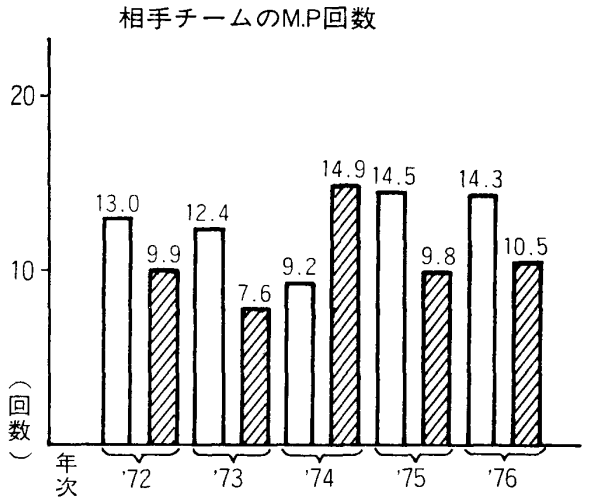
（第1図b）



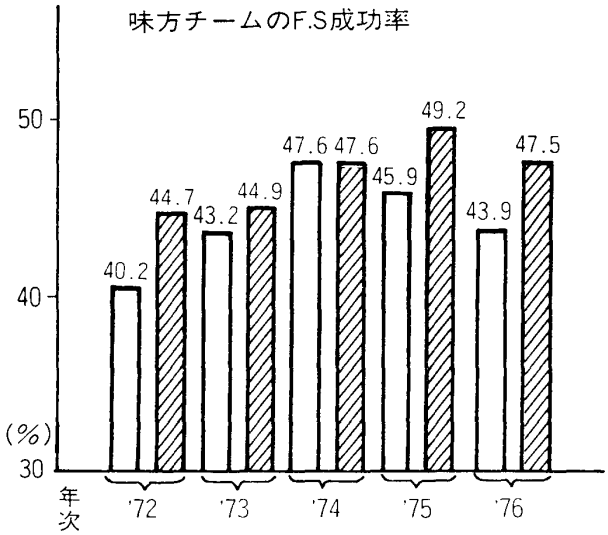
（第2図a）



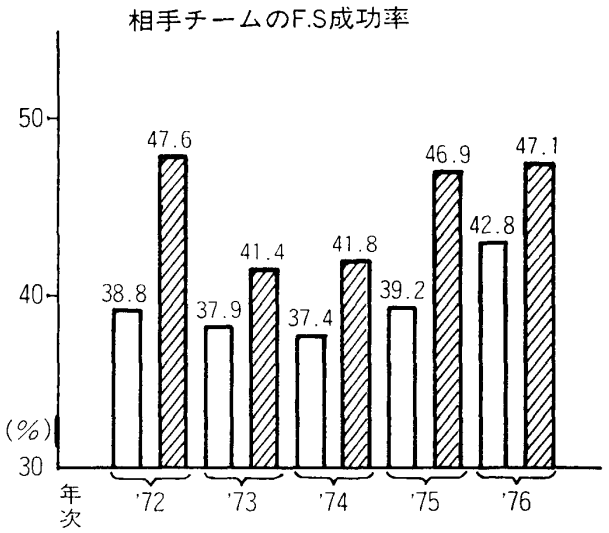
（第2図b）



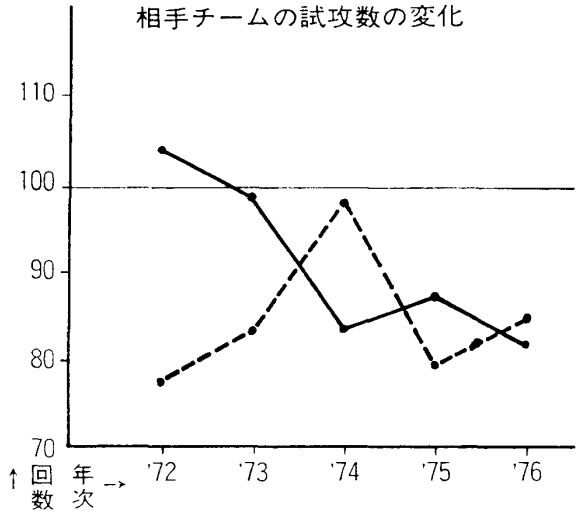
（第3図a）



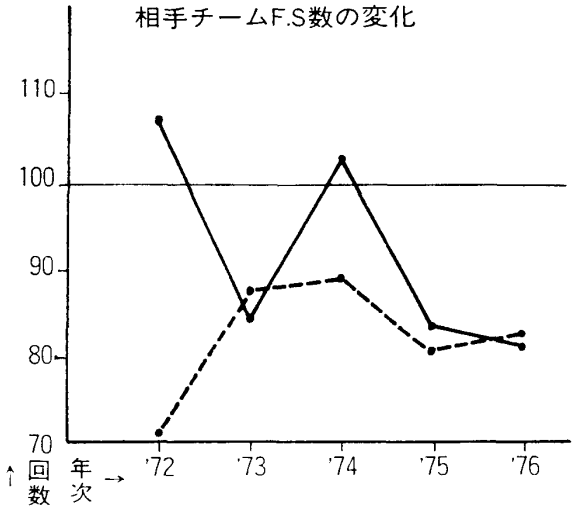
（第3図b）



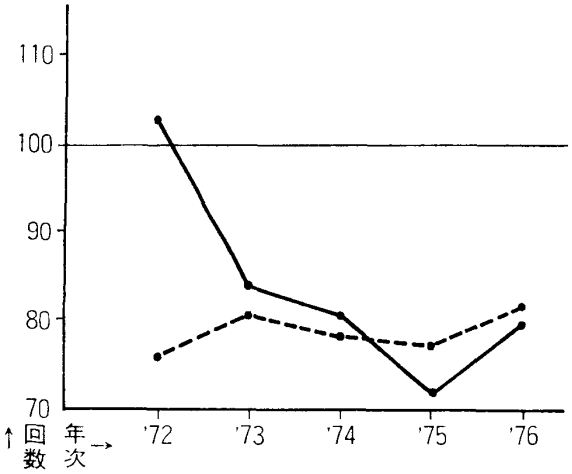
（第4図）
味方試攻数を100とした
相手チームの試攻数の変化



（第5図）
味方F.S数を100とした
相手チームF.S数の変化



（第6図）
味方FG数を100とした
相手チームFG数の変化



——— 国際試合　- - - - 国内試合　（1試合平均）

第3図bの国際試合の相手チームの野投成功率が40%を下まわっている状況から激しい動きの防御面での成功を看取できる．これが研究されて対戦している国内ゲームの相手チームは，野投の成功率は国際試合に比して高いが，逆に試攻数（第5図）が減少しているので，相手チームの得点力が減少していることを示している．

5. '75年，'76年における国泰人寿バスケット・チームは，このチームとしての全盛期の様相を示している．試攻数，野投成功数においても相手チームを凌駕している．安定したチーム力として攻・防に圧倒的な力の差を看取することができる．

ただ，'74, '75 年次における反則による自由投を与えた個数が余りにも多い（第5表参照）のは激しい防御からひき出された反則によるもので，防御面については，国際，国内両試合とも不安材料となっている．ボディ・コントロールの面の不充分さは，かくしきれない．しかしながら第2期の努力目標である〝体力と技術のバランス〟が或る程度達成されていることを示して，成果が見られる．

6. 防御面での不安さは残るが，チーム・デェフンスとして，第4図，第5図，第6図から推察できることは，試攻数，試野投数，野投成功数が'72, '74年の国際試合を除いて，相手チームは上まわっている．逆にいえば，相手チームに攻撃の機会を減少させていることから，防御面でも進歩したことを示すもの

である.

国際ゲームでは，前述したように相手チームの研究が，充分に行われない．特に遠征時においては相手チームからはスカウトされるが，次の対戦相手の状況は殆んど分らないことが多い.

したがって，自分のチームのできることをゲームで発揮することが重要となる．この点で，国泰人寿チームは，速い攻撃と激しい防御を主体としたチームの特色を充分発揮できるようになったと推察できる.

ヘッド・コーチの洪金生・コーチの許輝珠の5年間の努力と選手達の協力に支えられた指導計画は一応成功したと考えられる.

しかし，是正すべき点はミス・プレーが15%平均を上まわる点に着目せねばならず，今後の課題として残されていると思う.

(1980年7月28日受理)

文　　献

1) 牧山圭秀，吉井四郎，畑竜雄　共著
図説バスケットボール事典 p. 546, p. 560, p. 565 (1969) 講談社.

2) Frank, Macquir 岡三郎訳
"offensive Basket-Ball" p. 1〜p. 9 (1963) ベースボールマガジン社.

3) 小森正巳　体育科教育 Vol. 11 No. 4 p. 24 No. 6 p. 34 No. 8 p. 16 (1963)
〝強力バスケットチーム養成法〟 大修館.

4) 朱裕厚
現代籃球快攻戦術 p. 5〜p. 7 p. 34〜35 (1961)
台湾師範大学体育学会.

5) 吉井四郎
〝バスケットボールのコーチング〟 基礎技術編 p. 38〜39 大修館 (1978).

6) P. Newell, S. Inman
〝ファンダメンタル・バスケットボール〟 p. 5 (1969) 日本学生バスケットボール連盟.

7) 小森正巳
〝バスケットボールの指導に関する研究〟
京都府立大学学術報告（理学・生活科学）第30号 p. 53〜58 (1979)